View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

長野県立大学リポジトリ
THE UNIVERSITY OF NAGANO REPOSITORY
信州共同リポジトリ
REPOSITORY OF SHINSHU

1930年代の農村更生運動 ： 信濃農村社会教区と上水教区を中心に

著者	塩入 隆
雑誌名	長野県短期大学紀要
巻	51
ページ	59-70
発行年	1996-12
URL	http://id.nii.ac.jp/1118/00000485/

Creative Commons : 表示 - 非営利 - 改変禁止
http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/3.0/deed.ja

1930年代の農村更生運動
―信濃農村社会教区と上水教区を中心に―

塩入　隆*

1　日本メソヂスト教会の農村伝道

1922（大正11）年に杉山元治郎が賀川豊彦の協力を得て設立した「日本農民組合」の綱領の中に，政治的項目に並んで「農民学校の普及」や農村生活の向上に資する多くの項目が盛り込まれていた。日本農民組合の左傾化により，所期の目的達成が不可能になった段階で，杉山元治郎は設立時の日本農民組合の精神を引き継ぐものとして「日本農村伝道団」を1927（昭和２）年に設立した。この伝道団の趣意書は，日本農村の宗教的改造と建設のため，方策の第一として「農民福音学校」をあげ，農村伝道・農村セッツルメント事業の普及を掲げている[註1]。

1924（大正13）年の第二回日本基督教連盟の総会で，農村伝道の根本方針を立てるため，特別委員会を設置する建議案が可決された。翌25年の第三回総会で「農村伝道及農村教育調査委員の報告」が行われ，神学校に正科として「農村問題」の科目を置くこと，農閑期に「短期キリスト教農民学校」を開設すること，「農村セッツルメント」を設置する事が提案された[註2]。

これらの動きは日本独自のものではなく，エルサレムで開催された1928年の世界宣教大会は，農村伝道に関する討議を行っている。この大会の準備で，日本の教会も早くから委員会を設置して研究を続けていた。農村伝道は世界教会のテーマであり，日本の教会でも重要な問題として認識されていたのである。

1981年７月９日から三日間，御殿場の東山荘で開催された第一回農村伝道協議会で，「農村教区」の設定が第一に取り上げられている。そこでは「右教区の設定にはその土地の事情，地方の関係等を参照して各教派の協定に依る責任教区の配置を要するが故に，日本基督教連盟を通して調査研究の機関を設ける必要ありと認む」という一項目が付帯されていた。

同年７月22日から軽井沢で宣教師同盟の「農村伝道協議会」が開催された。この協議会は東山荘での日本基督教連盟の農村伝道協議会を補完する会議であったと推定される。両方の協議会には世界宣教大会から農村伝道調査員に指名され来日した，ケニョン・バタフィールドが出席している。農村伝道は日本教会と宣教師の二人三脚で行われたのである。

日本メソヂスト教会の農村伝道関係の集会は，1932（昭和７）年６月に静岡県三島で「東部農村伝道研究会」が東部年会の主催で開催されている。また，同年９月に西部年会福山地方農村伝道研究会主催の「福山方面農村伝道研究会」が，広島県福山で開かれた。この研究会と同期日に九州の福岡県草場村では「九州農村伝道協議会」が開催された[註3]。

この三つの研究会・協議会は，開催母胎と目的

*〒380　長野市三輪8-49-7　長野県短期大学

が違うこともあり，決議文も各様である。「東部農村伝道研究会」は，東部年会の農村教会と関係者を対象としたので，決議文の内容は他の二つの会合に比べると多岐に渡っている上，伝道的色彩が濃い。また，協同組合の組織化を打ち出す一方，献金に代えて生産物を捧げることを提案している。現金収入のない農村での捧げ物の具体的指導であった。

福山での研究会は，一地方の実践家が中心であったので，世界恐慌下の疲弊せる農村の救済が，主たる関心と認められる。九州の協議会は農村伝道委員が，日本メソヂスト教会の総会に提案する議案の審議である。

日本メソヂスト教会の教団レベルでの農村伝道の動向は，以上のようであるが既に見てきたように，地方では農民福音学校を中心に，農村伝道は新しい伝道活動として始動していた。

2 長野県北信地方に於ける農民福音学校

1902（明治35）年長野市に赴任したカナダメソヂスト教会宣教師ダニエル・ノルマン（Daniel Norman）は，20歳まで農業に従事していたが，敬愛する教職の兄の死で献身を志したカナダの農民出身者であった。

ビクトリアカレッジで学んだ学生時代には学生宣教団に属し，人々のアジア伝道への関心を呼び醒ます活動を行うと同時に，社会主義の研究会にも出入りする，社会的関心を持っていた人物であった。

長野市への赴任後は，職域伝道・文書伝道・禁酒運動に邁進し，部内宣教師として長野県北部（北信）地方から新潟県上越地方までを伝道圏とし，広域巡回伝道を任務としていた。日本人牧師を定住させることができない弱体の伝道地や，開拓伝道の新しい伝道圏がノルマンの責任下にあった。

長野市内の長野駅に程近い芹田地区に，日本メソヂスト長野教会（現長野県町教会，以後長野教会と表記する）は教会創立の当初から講義所を開設していた。ノルマンの赴任以後，この講義所はノルマンが主任となり，彼の秘書や鉄道ミッションの関係者が牧会していた。ノルマンの伝道が疲弊する農村の救済を目指す農村伝道に新しい方策を見いだした時，その拠点となったのが芹田講義所であった。この講義所を東北信の農村伝道の拠点とするために，長野市内の人々への伝道という使命から，北信全体に目を向け農村伝道を積極的に推進する教会とするため，名称を「日本メソヂスト北信中央教会」とし，長野県に届け出た。

この講義所の建物は1919（大正８）年に建てられ，週日は幼稚園に使用されていた。この教会の土地建物の所有者は在日本カナダ合同教会であり，幼稚園はカナダ婦人伝道ミッション（婦人伝道会社）が経営した。長野県への届け出書類によると，「北信中央教会」の設立終了は1930（昭和５）年４月10日であり，設立認可は10月７日である。設立者・管理者・布教担当者とも，ノルマン門下で関西学院神学部出身の滝沢四郎牧師であった[註4]。

第一回の「信州農民福音学校」は，活発に社会運動をしていた青年達を念頭に置いて企画された。即ち，1926（大正15）年１月，北佐久郡北御牧村に「土に親しむものの会」が生まれた。指導者は江渡狄嶺の影響を受けた竹内愛国（本名圀衛）で，東京で竹内愛国は基督者になっていた。北御牧村に帰った愛国は，弟の文次が通う小諸教会に出席するようになり，岸本信義牧師の指導の下に教会生活を送った。

この教会生活で知り合い岸本信義牧師の下で育っていた人々とともに結成したのが，前記「土に親しむものの会」である。彼等は現代物質文明（共産主義を含む）を否定し，人道主義的な農村文化運動を目指した。この会はやがて曲折を経ながら「農民自治会」の組織に合流した[註5]。

農民自治会の最後を飾る運動は，昭和２年の金

融恐慌下での農村モラトリアム運動への同調である。佐久電気消費組合運動と合流した電気料の不払い運動であった。この活動は共産主義運動の一派とみなされ，警察の激しい弾圧うけた。

過激化した運動から離脱した井出好男や平林瀧男青年のことは，ノルマンの心を痛める問題であった。これらの青年を誘って農民福音学校が計画されたのである。

しかし，農民福音学校に集まった青年の生活は，ノルマンが理解する以上に左翼的思想や運動に関わっていた。これらの青年は教会に集って問題に目覚め，教会の非実践的態度に絶望して教会を去り，京都の一燈園に住み込み，西田天香の偽善性に絶望してまた教会に戻って来ていたのである。

共産党の指導するラディカルな闘争について行けなかった青年たちに，日本農民組合運動の先駆者である杉山元治郎をまねいて，自分が洗礼を授けた農村青年に活動の指針を与えようとしたのである。

ノルマンは文書伝道のため『信州教壇』という月刊誌を発行していたが，この誌上に次のような広告を出したという。広告の内容は「教界時報」に摘録されている[註6]。

見よ。苦しみ悶えつゝも上昇しつゝあるもの，それは農民大衆である。新しき農民社会は一歩一歩建設されつゝある。農民的経済，農民的自由，農民的世界観は大地の上に勃興せなければならぬ。農民は今先駆を要求しつゝある。指導者を要望しつゝある。我等は茲に立って農民福音学校を建設す，先駆そして指導者にイエスの思想なる炬火を與へんが為なり。農民福音学校は名は学校であるが，寺子屋である。デンマークのグルウンドヴィッヒの精神に従うてやるので人格と人格の接触する教育の道場である。故に凡ては自治的で本人の修養に待つ事も多いのである。

教場ではない。器具もない。所謂学校の名に捕はれる人はこの学校に入る資格はない。修養の志しに燃えて農村改造に突進せんとする戦士の学ぶ處である。大阪より杉山元治郎，名古屋より白石喜之助，上州より栗原陽太郎の三氏を聘して，農民福音学校は其学陣堂々たり。勧む。来たりて我等とともに学ばれんことを。

校長　神学博士　デー・ノルマン

農民学校細則

一，場所　長野市県町十二番地，ノルマン邸内進徳館。

二，日時　昭和四年二月二日午前一〇時開校　二月十一日午後一時閉校。

三，宿舎　寄宿舎の設備あり。米五升，味噌五〇〇匁，副食物例えば芋，大根等少々御持参の事，自炊自治精神の生活（但し右の者御持参なき時は，これに相当する価額を食料として納むる事）

四，費用　汽車，小使等は自辨其外の費用は一切不要。

実践宗教学　校長神学博士　ノルマン
社会学（農村問題及び農村一般進化）
特別講師　杉山元治郎
新約聖書概論　長野教会牧師　牧田忠蔵
旧約聖書人物考　小諸教会牧師　岸本信義
教会歴史（現代宗教一般）
宣教師　アルフレッド・ストーン
音楽（宗教音楽一般）ミセス・ノルマン
宗教教育　芹田講義所牧師　滝沢四郎
農村の改良と指導　特別講師　栗原陽太郎
世界の諸宗教
白石喜之助（日本メソヂスト教会牧師）
世界の現状と日本の地位
森本　清
日本医学の現状　長野日赤病院院長　相原千里
雄弁術に就いて　武田徳倫[註7]

「教界時報」紙上で信州農民福音学校と紹介されているこの農民福音学校は，ノルマンの文書伝道の範囲の青年に案内されたのであるが，集まったのは長野県下七郡からの23人であり，内6名がキリスト者であった。

ノルマンが願ったのは，「福音宣伝の一機関」としての性格であったが，開校式の当日，一青年が発刊間もない日本メソヂスト教会社会局発行の「マルクスかイエスか」という書物を掲げて，「ロシア共産主義の問題に捕らわれたる関心を持てる

人」はこれを買うようにと勧めたという。このエピソードはノルマンが「教界時報」に掲載した「農村伝道の一機関としての農民福音学校」という，信州農民福音学校の報告に見えている[註8]。

グルンドヴィッヒを下敷きにしたノルマンの福音学校は，杉山元治郎の唱えた「農民福音学校」の目的からみると，社会科学的な側面は希薄である。社会改造を目指すにしては宗教関係の講座が多いが，キリスト教精神の涵養で，戦う農民戦士を作ろうという，まさにデンマーク的な発想であったのである。

参加者を20人ほどと想定して計画したが，実際には23人の農民が集まった。ノルマンが自宅の庭に建てた学生寄宿舎の進徳館の一階と二階を全面的に開放して，希望者を収容した。この参加者に加えて長野教会の信徒も連日部分参加したので，農民福音学校は連日五十人近い受講者でにぎわった。

第二回農民福音学校は，翌1930（昭和５）年の初春，第二回「信州農民福音学校」として開かれた。会場と寄宿舎は進徳館に代わって，北信中央教会が使われる事になった。この年，日本メソヂスト豊科教会の腰山周蔵牧師が，第一回豊科農民福音学校を開設している。

1931（昭和６）年１月19日から一週間，第三回「信州農民福音学校」が北信中央教会で開校され，アルフレッド・ストーンが校長に就任した。

同31年１月23日から27日までの五日間，「東信農民福音学校」が日本メソヂスト小諸教会を会場に開催された。井出好男，平林瀧男が中心で，杉山元治郎・ストーン・蒔田正喜・川村兵治（日本メソヂスト教会牧師）が講師であった。ノルマンの農村伝道の仕事は，確実にストーンに引き継がれて行った。

アルフレッド・ラッセル・ストーンは，1902年４月29日にカナダ・オンタリオ州ケント県ハイゲート村に，農家の長男として生まれた。高等学校は15キロ離れた町の高校に入学したが，豊かではない家庭の事情から，寄宿しないでバギーという荷物用の馬車で通学した。

1920年９月，ストーンはトロント大学に入学した。カナダ・メソヂスト教会の神学校であるヴィクトリアカレッジで神学を修めると同時に，農業経済学も学んでいる

アルフレッド・ストーンが大学に学んだ時期は，第一次世界大戦終了直後であった。多くの前途有望なトロント大学生が欧州戦線で戦死した。今日，トロント大学には戦死した学生を記念する塔が立っていて，その塔には戦死者の名前が彫り込まれている。

在学生の中に，宣教師として日本に赴任する希望を抱きながら戦死した先輩の志を継ぐというグループが生まれた。このグループの中には，Ｇ・Ｅ・バット，アウタブリッジ，ハワード・ノルマンなどの優秀な神学生がいた。

アルフレッド・ストーンはこのグループに最年少の学生として加わった。当時，ヴィクトリアには佐藤敬一郎と長野教会出身の滝沢四郎が留学していた。ストーンはこれらの日本人学生や，長野育ちのハワード・ノルマンから，日本及び日本人の事を学んでいった。

1925年にカナダ・メソヂスト教会の全部と，長老教会と組合教会の大部分が大合同し，「カナダ合同教会」が誕生した。ストーンは1926（大正15）年の夏に，新生「カナダ合同教会」の宣教師として日本に派遣される事になった。

東京で二ケ年を過ごしたストーンは，1928（昭和３）年の日本メソヂスト教会の年会で任地が決まった。行き先は大先輩のいる長野市であった。

長野市に赴任したストーンは，老夫婦だけで住むダニエル・ノルマンの宣教師館を住みかにした。この二人はともにカナダの農民の生まれであり，社会問題の理解も共通していた。ノルマンの築いた人間関係，伝道方法，文書伝道はすべてストー

ンに引き継がれることになった。

ストーンが赴任した当時の長野教会は，長野県の廃娼運動の先頭に立って活動していた時期で，婦人層を中心に青少年の信徒も，社会活動に積極的に参加していた。

1930（昭和5）年3月，トロント大学の学友佐藤敬一郎牧師が，僅か一年の牧会で東京の九段教会に転任すると，後任に真野萬穰牧師が赴任して来た。

真野は1928（昭和3）年の青山学院神学部の卒業生で，同級生には木俣敏，郷司浩平，大村勇など，後に日本メソヂスト教会を指導した大物が揃っていた。

1930年の長野地方には，北信中央教会に滝沢四郎，上水教区には1930年青山学院神学部卒の花里弘，小諸教会には中島武夫らの若手教職が揃い，そこへ若い宣教師アルフレッド・ストーンが加わっていた。

これらの教職は，しばしばノルマン邸で会合し，農村伝道について激しい論議を戦わせている。北信地方に若い力が結集し，意欲的な伝道を協同して展開したのである。これらの若手教職は，カナダのトロントで学友であったり，青山学院神学部で同期であったりする，親しい間柄であった。

引退間際のダニエル・ノルマンは，これらの若手の議論に耳を傾け，その結論を善しとした。

農繁期託児所，農村女子福音学校，更生家庭学校，巡回文庫，デンマーク農業の紹介などは，この会合から生まれた計画であった。デンマーク農業の紹介をするのは，ノルマンの賜暇中ノルマン邸の留守番をし，屋代の伝道を担当した，かっての福音士平林廣人であった。平林は小学校長のとき，木崎夏期大学の開設に尽力し，若くして長野県教育界を去り，デンマークに留学し，デンマークの専門家となった人である。

1931年4月，農村伝道調査員ケニョン・バターフィールドが来日し，茨城・滋賀県につぎ長野県下を視察した。ケニョンの視察に滝沢四郎と共に同道したストーンは，最初の賜暇でカナダに帰り，伝道現場での問題意識を持って大学で研鑽した。

翌32年にはラルフ・フェルトンが日本基督教連盟農村伝道部の招きで来日し，軽井沢で開催された農村伝道協議会で講演した後長野県北信地方を視察した。北信中央教会の農民福音学校の働きについて，フェルトンはその著『農村教会の研究』で紹介している。

北信地方では農村女子福音学校も開催された。第一回の「長野農村女子福音学校」は，1931（昭和6）年3月25日から31日まで，長野市の旭幼稚園で開催された。農民福音学校が男子ミッションの主催で行われたのと異なり，女子福音学校は長野部会婦人事業委員とカナダ婦人伝道会社の共催で行われた。その職員構成は次のとおりであった。

校長		エラ・レディアード
講師	創世記の話	川村兵治
	幼稚園の歌	田中はぎの
	我が家の宗教行事	滝沢四郎
	児童心理	田口ひろ
	農村人生観	真野萬穰
	実用初歩洋裁	国分咲子
	農村女子の使命	A・R・ストーン
	編物	牧野静枝
	禁酒衛生	丸山止才夫
	病人料理	エラ・レディアード
	仝	丸山梅実
	イエス傳	畑　みさお
	幼児教育	永井たつ
	手芸	武藤君子
	朝拝指導	吉沢久子[註9]

講師の男性教師陣以外は，婦人伝道師の吉沢を除いてすべてが幼稚園教師である。男子ミッション経営の須坂小百合幼稚園の畑みさお以外は，カナダ婦人伝道会社傘下の幼稚園の教師たちが，総出で指導に当たったのである。

福音学校という名称は類似しているが，農民福音学校と同一者による企画ではなく，主催団体は異なっていた。

受講生には南安曇郡豊科，上伊那郡高遠等，遠隔地からの参加者もあったが，ほとんどは東北信からの生徒で，総勢は21名であった。豊科からの参加者は丸山周子で，丸山梅実の姪の看護婦で後には従軍看護婦として出征した。この福音学校のスローガンは，「神の光もて我が村の浄化と幼児保護のために我が手と心とを捧げて労せん」であり，学科の内容を見ると，託児所で幼児を預かるに必要な知識と，信仰の培養が目的と思われるカリキュラムになっている。

第二回は「善良有為なる農村女性の養成」を目的に，1933（昭和８）年２月22日から一週間開催された。講師は数名の婦人伝道師と幼稚園教師が主体で，宿舎は旭幼稚園寄宿舎と長野教会の牧師館が使用された。

婦人ミッションの主催ではあるが，教会も自分の仕事として参加したのである。募集定員は15名であったが，14人が参加した。最年長者は25歳であった。

この第二回の女子福音学校開催の時は，平行して男子の農村福音学校がノルマン館を会場に開催されていたので，男女の福音学校が一緒に開校式をしたり，合同で講義を聞いたりしている。この男子の福音学校は「長野福音高等学校」であり，入学資格は既に農民福音学校を卒業したもので，かつ新生会員[註10]であることが条件であった。講義の中で，松本卓夫の新約時代の展望，真野萬穰の農村経済学，平林廣人のデンマークの話，などは女子も聴講できた[註11]。

賜暇があけて日本に帰任したストーンの任地は静岡県浜松であったが，結婚したストーンは夏の休暇はノルマン家の食客の立場を返上し，長野県上水内郡野尻湖畔の外人村（現国際村）に別荘を構えた。この地の伝道は花里弘が担っていた。夏休みの野尻湖はストーンの伝道地でもあり，住民への英語教室に西洋野菜の栽培の奨励に，ストーンは休暇を楽しむのみではなかった。

ノルマンは1932（昭和７）年から，農民福音学校に参加した青年やその周辺の農村青年を対象に，「北信新生」という雑誌を発行し始めた（註：昭和７年５月３日第三種郵便物認可）。

執筆者は北信一円の教会の牧師と農村青年であった。雑誌の編集にはノルマンの秘書があたり，後にはストーンの秘書が担当し，1940（昭和15）年からは日本人牧師の手に編集が移されている。この雑誌は，北信における農村青年を養う伝道牧会雑誌の役割を担い，ノルマンの広域伝道を支えた。

この農村伝道に取り組む北信濃地方に，アメリカのドルー神学校で新約学のほかに農村社会学を学んだ木俣敏が，1932（昭和７）年に滝沢四郎の後任として，北信中央教会の牧師に赴任してきた。

3　信濃農村社会教区

1934年にノルマンが引退し，浜松からアルフレド・ストーンがノルマンの後任として長野市に転任してきた。北信地方にはストーンと木俣敏を核とする農村伝道の強力なスタッフが揃うことになった。

日本メソヂスト教会社会局は，1934年の東部年会報告中に「地方教会と大都市教会との産業による経済的関係を保つため，又，メソヂスト経済ブロック組織の目的のため，事業部を設置し，専任幹事を置き専ら是が経営に当らしめたいものと希望いたして居ります。」[註12]という，「希望」と題された報告には馴染まないものを行っている。苦境に立つ農民を抱える農村教会と，大消費地の都市教会を，「産地直売」方式で結びたいという提案であった。

この1934年の東部年会「農村伝道委員」代表は，長野教会の真野萬穰牧師であった。真野は年会で

の報告で，農村福音学校が開設された八部会を挙げ，長野部では「須坂・篠ノ井・北信中央農村福音塾にして総計七十名の学生あり」と報告し，農村託児所は「北信中央二ケ所，須坂，岡谷，丸子」で開設していると報告した。これは1933年度の活動報告である。

翌1935（昭和10）年の東部年会では，次のような農村伝道委員報告が行われた。1934年度に於いて日本メソヂスト教会の農村伝道は，前年の真野萬穣報告の線で取り組まれていたのである。

（前略）昨年会の決議に基き総会農村伝道委員と協力の上去る一月一五日から一七日迄三日間，農村伝道協議会を長野教会に於て開催致しました。出席者は各部代表其他有志三十五名（後略）

以上は，東部年会農村伝道委員の報告であるが，総会農村伝道委員は次のように同一の協議会の報告をしている。両者に多少の違いがあるが，以下総会委員の報告を引用する。

協議題＝1．過去における農村伝道の批評　2．其実績　3．現代農村に基督教の負わされたる使命　4．農村伝道の特種性　5．日本メソヂスト教会農村伝道再確立の宣言
協議会の講演者＝代議士杉山元治郎（米穀対策に就いて）長野県産業課長杉原定壽（農村に於ける産業指導機関について）上田蚕糸専門学校教授早川直瀬（蚕業対策に就て）
農民福音学校＝静岡県藤枝・大宮の2カ所　北海道並関東部の水海道，松山，島村，西那須野，本庄において，長野部は北信中央，上水教区，軽井沢，新井，屋代において，北陸部は富山において農民福音学校開かれ有益でした[註13]

という報告がある。農村伝道は教会の農民への伝道を超えて，農民の更生運動に変化する兆しを見せ始めている。

この35年度の総会社会局で，真野萬穣は農村漁村の社会事業委員（因みに生江孝之は都市の貧困対策）を分担し，年会社会事業委員としては書記を担当していた。年会社会事業委員は「農村伝道委員に充分なる協調を保ちつゝ，農村福音学校及託児所の開設に努力されたき事」とう提案をしている。

「日本メソヂスト新聞」の1936（昭和11）年1月24日号は，4段抜きの見出しで「静岡県と長野県に農村伝道のセンター」と報じ，3月よりカナダミッションで実施と伝えている。

カナダミッションでは社会局と協力して農村伝道の新生面を開くべく静岡県下及び長野県下に二ケ所農村伝道センターを設置し，従来の教会と農村との関係をより緊密にして行く計画を立案直に準備中であったがこのほど具体化し来る三月の年会より開始することに決定した模様である（以下略）

この記事の後半は，真鍋頼一社会局長の談話で，静岡ではなるべく辺鄙な土地で教育的・社会的施設を作って伝道するが大井川方面で土地を物色中，長野県では川中島（現長野市）にセンターを置き，医療組合やセッツルメント的農村社会事業を行うが，この方は担当者も決まっていると述べている。

このカナダミッションの資金援助をうけて，1936年の東部年会で社会局は次の協議題を提出した。

社会局の計画に成る，左記三種の農村社会事業を実現すべき事。

イ，農村セッツルメント　信州，川中島
ロ，現在の教会を中心としての農村奉仕　静岡，川崎
ハ，開墾を主としたる農村教会の建設　静岡，大井川

この提案が通過して，セッツルメントを目的とする信濃農村社会教区が設置された。従来の北信中央教会とは別の教会を組織したのである。即ち，この年会から北信中央教会は長野教会牧師の兼牧となりストーンが協力牧師となった。信濃農村社会教区の中心教会として，従来は長野教会の講義所であった「篠ノ井講義所」があてられ，長野教会と北信中央教会の篠ノ井方面の信徒が，この講義所の信徒に分属された。

この新事業の担当者は，北信中央教会の牧師であった木俣敏が任命されたことは，言うまでもない。従来，北信中央教会が伝道地としていた稲里・青木島の出張所は，この社会教区に属し事業の重要な地域となった。北信中央教会には都市部の伝道部分のみを残したのである。

信濃農村社会教区の事業は，事業を行った教会が消滅したので資料が現存しないのであるが，1938（昭和13）年の東部年会でなされた社会局長の報告中に，次のような概要が残っている。この教区は1936年にスタートしたのであるが，一年後には（37年度中）かなりの活動実績を残したのである。

一，川中島農村社会館（長野部）館長　木俣　敏
　イ，伝道
　　1．篠ノ井教会　稲里教会
　　2．文書伝道郡内十ケ町村
　ロ，社会事業
　　1．農繁期託児所
　　稲里村（一カ所）村方面事業委員並に児童愛護会と共同経営
　　青木島村（二カ所）村社会事業協会並にカナダ婦人宣教師団も共同経営
　　期間　七，八，十，十一の四カ月間
　　2．食生活改善事業中パン窯（一〇月末新設）
　　実施二カ月間の成績
　　利用戸数　二五〇戸
　　消費小麦粉百二十二貫
　　団体利用延回数七回　二百六十八人分食料
　　講習会　二回
　　3．年末救済事業
　　募集せる古着，不用品二百余点を稲里村方面委員と共同にてカード階級に廉売配布。
　ハ，教区事業の将来性
　　1．木俣牧師は長野県更生計画ノ基準村なる稲里村の更生委員会教化部委員として教化並に社会事業方面を担当活動中にて村内に於ける教区の基礎は堅実に向かいつつあり。
　　2．村更生委員会，組合，農会との協同並に支持によりて実施の運びに到りつつある施設事業
　　A．食料自給計画中農産加工方面
　　(1)　膨張穀物製品加工施設
　　(2)　果実蔬菜罐詰製造施設
　　(3)　果実ジャム製造施設
　　(4)　アミノ酸製造施設
　　B．保険衛生計画
　　(1)　巡回看護婦並に所用施設
　　(2)　食生活改善並に衛生事項普及計画
　　C．授産計画
　　(1)　女子授産（手芸和洋裁）
　　(2)　男子授産（共同作業所）
　　3．会計（四月より十二月迄の九ケ月）
　　収入　八二〇円（内訳　カナダミッション七二〇円　メソヂスト社会局一〇〇円）

これを見れば，何が信濃農村社会教区で行われていたのか分かる。伝道が表面に出るのではなく，地域社会に奉仕し，疲弊する農民の味方になる姿勢が濃厚である。

稲里の教会は，村では稲里隣保館と呼ばれ，託児所から一歩進んで，後には通年制の保育園も開園した。同じ場所で伝道しながら，信濃農村社会教区の仕事は男子ミッションで経費を受け持ち，保育園は婦人ミッション（伝道会社）が経費負担をしたのである。

教会が地域の更生運動に取り組み，世俗の団体と共闘した稀有の事例である。この教区は長野教会とは直接関係は無い仕組みになっているが，講義所の時代から篠ノ井・南原（木俣牧師の居住地）は長野教会の伝道地であったから，社会教区ができても信徒には同教会という意識があり，保姆も旭幼稚園（長野教会と密接な関係がある）教師から派遣や転任がされ，婦人伝道会社の職員である婦人伝道師も派遣されている。この教区は総会社会局直轄の事業であったが，資金はカナダ合同教会の支援であったのである。

女子福音学校はこの農村社会教区と深い関係を持った。即ち，第三回農村女子福音学校は

1935（昭和10）年1月22日から23日にかけて，「北信中央女子福音塾」という名称で，稲里村川中島幼稚園（実体は保育園）を会場に開催された。信濃農村社会教区発足の前夜であったから，木俣敏の「農村に於ける婦人事業」，稲里村青年会長青木克平の「農村女子公民の常識」，平林廣人の「デンマーク農村の婦人」などの講義があった。

1936（昭和11）年の第四回農村女子福音学校は，2月24日から26日まで「農繁期託児所保姆講習会」として，旭幼稚園で開催された。出席者を見ると，教会関係者の訓練と言うよりは，実技指導講習会の色彩が強く，基督教関係ではわずかに「宗教座談会」という課目があるだけである。長野県社会課主事も講演している。

1938（昭和13）年には，1月14日～23日の10日間，第一回「更生家庭学校」がカナダ婦人ミッションの手ではなく，長野部の社会事業委員と婦人事業委員の共催で，稲里村隣保館を会場に開催された。家庭看護学，料理，裁縫，家庭美化，幼児保育，家庭娯楽，家庭訓など，当初の福音学校の理念から外れ，夫婦道，母性道など，戦時下の銃後の女性の育成をテーマにしている。しかし，宗教色を薄めてしまったのはこの第一回のみで，第二・第三回では聖書が語られ，礼拝があった。1940（昭和15）年の第三回の「更生家庭学校」では，長野教会の有馬牧師が聖書講義，有馬夫人が家庭問題懇談会の指導をしている[註14]。

4　上水教区の実践

長野県北部の上水伝道教区は，1936年に会堂を建設して独自の四季会を設立し，カナダミッションの援助で，将来自給に進むべき特殊農村工業を計画していた。この教会はストーンのこよなく愛した野尻湖の地域にあったので，ストーンの指導で農村更生運動が行われた。川中島地区の信濃農村社会教区とは別のものであった。1937（昭和12）年7月に立案された「上水教区事業計画」が，古間村にあったこの教区の教会の四季会記録に綴じ込まれている[註15]。立案は7月であったので，37年の東部年会に掛けられていない。38年の東部年会の社会局の報告に実践報告があるが，それは一部分であるので，長文ではあるが引用してみる。以下の引用でわかるように，立案当初から社会局の全面支援を予定していた。それが可能な状況であったのである。かくて，ストーンの影響下にあった北信濃の二つの教区は，互いに補完し合う仕組を持っていた。

（昭和十二年七月）

日本メソヂスト教会
　上水教區事業概要
　　教會堂所在地　長野縣上水内郡古間村
　　（柏原駅下車）
　　主任教師　穂　積　　弘
　　（同郡柏原村）
　　宣　教　師　A・R・ストーン
　　（長野市南縣町三三）

一，教　　会

古間村に定期集會を開設せしより本年は四年目にして，教会は

信仰を率直に生活の中に活し『主の祈』の社會的實現を目標として，思想することゝ生活することゝの一致を主題として信仰即生活の實現期（ママ）し一切の経営を考慮され計画しつゝあり，且廣汎なる教区の活動を円滑ならしむる為には教會内各團体の自主的活動を主体として信徒の奉仕を活潑に運用すべくその方針下にあり

其の具体案として別記の事業が遂行されつゝあるも，教會内にあっては

1．各部落に信徒によって管理されたるS・Sの開設（既設六校）
2．勸士（平信徒）の養成と勸士の手による定期集会の設置
3．物納による献財の徹底化（現在月約献金の一部は物納なり）

等實施計画されつゝあり

二，組　　織

當教區は，夙にデー・ノルマン氏が農村伝道に着眼して着手したるところにして，近年社會局長真鍋頼一氏，宣教師エイ・アール・ストーン氏及びカナダ

ミッションの積極的指導と援助に由り，農村社會教區としての堅實なる歩みを初めたるものにして，當教區内に於ける社會的事業の經營管理に対する組織は左の如し

日本メソヂスト教會上水教區社會事業理事會
（但正式なる承認を未だ經てをらずー名称は仮称）

理　事　日本メソヂスト教會社會局長
〃　〃　伝道局長
〃　関係ミッション代表一名
〃　日本メソヂスト教會長野部長
〃　〃　上水教區主任牧師

三，産　業　部

1．三友社（鎌製作事業）上水内郡古間村大古間

a．組織

三友社役員會　イ．牧師　ロ．各部主任

b．工場の建坪　十三坪　木造板葺

c．目　的

(イ) 地方の産業開發

(ロ) 生産手段の変革過程にある鎌製造に對する示唆

(ハ) 鎌工の生活改善

(ニ) 離村すべき運命下にある二男以下の堅實なる職業の確保

該事業の資金はミッションより借り入れたるものにして五ケ年間据置十ケ年間に年賦償還をなす

2．水穴野菜組合　上水内郡古間村水穴

a．組　織（役員會）

(イ) 牧師

(ロ) 農事實行組合より選出されたるもの

A．古間村水穴農事實行組合を主体として，教會は之を援助し農村更生計画の一助を目的として，本年よりコーンの罐詰製作を開始し逐年該工場を利用して農産物の加工に進む予定なり

工場の建坪　十坪　木造板葺

B．同組合を援助指導して，避暑地に出荷するを目的として，既に五ケ年來西洋野菜の栽培及出荷に対し斡旋しつゝあり

3．販　賣　部（共勵會委託）

信濃農村社會教區（牧師木俣敏氏）と提携し，同教區にて生産されたる商品の販売を斡旋しつゝあり

4．予 定 事 業

(イ) 山羊の普及と山羊乳使用の奨勵

(ロ) 山羊乳の出荷（野尻避暑地及ＹＷＣＡキャンプ）

(ハ) 果實の植樹

(ニ) 農産物の加工

(ホ) 特定組合及物々交換の形態を考慮に入れたる生産販賣機関の設置

四，社 會 事 業

1．友愛資金（教會幹事會管理）

教會員及び其の家族の不時の金融に便し，且會員及Ｓ・Ｓ生徒の慶弔及病気其の他の見舞を目的として，クリスマス献金及指定寄付を積み立てつつあるも，目下資金僅少なる故専ら見舞にのみ使用しおれり

2．頼 子 講（講世話人，毎月第二日曜礼拝后）

目下月懸一円口一八本あり（内教會員以外持分三分の一）

3．理 髪 班（共勵會）

目下教會員及Ｓ・Ｓ生徒により活用されつつあるも，一般化の計画を進めつつあり

以上今日一般に言う社會事業と同一視得ざるやも知れざるも，計画の意圖は社会事業の精神によるものにして，教会員を主体としたるものなり

4．予定事業

(イ) 共同炊事場の建設

(ロ) 農繁期託児所及常設託児所の設置

(ハ) 堅實なる農村娯楽設備の建設（内實現しつつあるものあり）

五．教 育 部

1．福音塾（幹事會）

既に毎年開講しつつあり

2．青年夜学校（共勵會）

青年男女の普通教育の補修を目的として開講せるも，目下休講中

3．圖書館（共勵會）

蔵書僅少なるも北信新生會圖書館と連絡をとり，活發に利用されつゝあり

4．予定事業

(イ) 青年夜学校の充實

(ロ) 図書館の充實

(ハ) 職工養成学校の開設（三友社）

この上水教区の事業は，1938（昭和13）年３月の日本メソヂスト教会東部年会で，社会局長真鍋頼一によって「長野部上水教区産業部報告」とし

て，三友社の鎌の生産を中心に説明されている。年会の議を経ずに事業は始まり，年会はこの事業を追認したのである。真鍋の報告によると，経費は37年度が1353円であり，38年度には1500円の予算を計上している。

コーンの缶詰化は38年の主たる事業目標であった。鎌の会社の三友社は教会の役員会が経営の主体であり，西洋野菜の栽培と玉蜀黍の缶詰製造の「水穴野菜組合」は，地区の農民の組合に教会の牧師が参加する協同組合形態であった。恐慌で痛めつけられた農村の二・三男に職業の機会を与える鎌の会社は，動力ハンマーを導入して，在来の地場産業に新風を吹き込み，これは向槌を勤める農村婦人の労働軽減につながった。

五　終わりに—農村伝道と社会更生運動

日本メソヂスト教会の農村伝道は，世界教会の関心に対応しつつ，教団としての体制を整えていった。先駆的には，杉山元治郎の農民福音学校に共鳴したダニエル・ノルマンによって，長野県北部で農民福音学校が開始され，カナダ合同教会婦人伝道ミッションによる農村女子福音学校が，同一歩調で始められた。

ノルマンの農村伝道の関心は，自身が農民出身であることにもよるが，彼は1900年代からデンマークの国民高等学校や農村教育（Rural Education）に関心を持っていたことは，彼に影響を受けデンマーク研究家になった平林廣人が証言している。

この様な農村伝道の一環である農民福音学校や農村改良運動は，教団の伝道局の農村伝道委員の所轄であった。1927年10月の教団総会で真鍋頼一が社会局長に就任したが，この真鍋が日本メソヂスト教会解体まで社会局長を務め，ことに1935（昭和10）年からは牧会を離れた専任の社会局長となった。

農村伝道は昭和の大恐慌時代に農村更生運動の色彩を強め，1936年からの木俣敏とストーンを中心とした信濃農村社会教区は社会局の管轄下でセッツルメントとして行われ，上水教区の事業も社会局の農村産業振興事業として行われた。

勿論前述したように，これらの事業はカナダ合同教会の献金がなければできなかったので，カナダの資金を導入して理想の具体化を図ったストーンの働きであったという見方も当然成立しよう。しかし，トロントグループと真鍋頼一の人脈の突出した働きであったが，教会の社会的責任の遂行であったという評価はできよう。この農村社会更生救済の直接的動機は，1935年の東部年会でのノルマンの報告に端的に見ることができる。

> 経済界に於ては，我が長野部は特に暗雲たれ込めて，猶晴れやらぬという様である。嘗つては製糸工業繁栄の中心たりし地の多くの工場は，家屋税の節約の為取壊され野原と化し，又かっては好況を謳われし人々の失業し，生活戦線に彷徨する者も少なからぬ様である。思想の偏狭と分争は時代を益々紛糾せしめ，之らのあるものは，表面に表れずとも我が宗教活動を妨害しつつあるものもある様な有様である。（後略）

伝道者として，目の前の人々の苦難を見過ごすことができなかったわけで，この思いがこの地に特異なキリスト教運動を誘致することになったのである。

運動の内容は，恐慌時代のアメリカのドルー神学校で農村社会学を学んだ木俣敏，主の祈りの地上での実現をめざしたストーン，真鍋頼一の下で専任の社会局幹事をした中島武夫，年会の農村伝道委員・社会事業委員をしていた真野萬穰等が，長野県北部の教会の牧師として在職していた事情も，除外することのできない条件である。

農村伝道を伝道局から社会局に移し，セッツルメント，託児所，協同組合，産業組合，生活改善，農村更生運動等を実践したのが，この時期の日本メソヂスト教会の農村伝道の特色である。

しかし，これが日本メソヂスト教会の農村伝道

についての統一見解であったわけではなく，1939（昭和14）年の総会に，東部年会農村伝道委員から「農村伝道部設置に関する建議案」が出された。農村伝道部を総会直属にし，この下に東西年会の農村伝道委員を属さしめ，組織の整備を図ろうとしている。同一の建議案は西条寛雄外五人からも出されている。

39年に至れば，国民精神の振興という国策に応じて，農村教会を農民道場に改編しようという運動があった状況下で，農村伝道は変質をせまられた。また，農村更生を目指した農村社会教区も，1940（昭和15）年にはカナダからの資金の途絶と，日本基督教団成立で事業の中止を余儀なくされたのである。

註1　日本農民組合の役員中に，メソヂストでは名古屋中央教会の小川渙三がいる。

2　日本基督教連盟編「農村伝道指針」第一編3～4頁所収

3　日本メソヂスト教会農村伝道委員編「農村伝道指針」1933年刊　83頁～　飯沼二郎『日本農村伝道史概説』P68-71にこの三つの協議会の決議文がある）

4　「神仏道外基本台帳」長野県庁文書

5　大井隆男「農民自治運動史」銀河書房　1980年

6　『信州教壇』は今日未見である。「教界時報」の1929年3月8日，15日号（1946，1947号）に，ダニエルノルマンは「農村伝道の一機関としての農民福音学校」という論文を寄せている。この8日号中に『信州教壇』1月号に広告を出したと書いている。

7　関西学院卒，但し神学部ではない。ノルマンの秘書。文書伝道を担当している。

8　「教界時報」1929年3月15日（1946号）

9　「第一回長野農村女子福音学校記録」昭和6年3月　長野県町教会蔵

10　新生会は1932年5月に結成され，毎月「北信新生」という雑誌を発行している。1号から44号は未見である。以後の号は筆者が所蔵。

11　「第二回長野農村女子福音学校記録」昭和8年2月　長野県町教会所蔵

12　東部年会報告（昭和9年）44頁，社会局長報告

13　東部年会報告（昭和10年）38頁，184頁

14　詳しくは拙著「長野県町教会百年史」参照

15　この教会は第二次対戦下に長野教会の出張所となり，教会としては消滅した。個人の手にあった四季会記録の一部は，現在筆者の手にある。